

保護者と子どもの育ちを展望する支援の試み
—「サンタクロースからのプレゼント」に関するアンケート調査をもとに—

伊 藤 美和子

An attempt of the support by prospecting children's development with
parents: Based on the surveys on 'Presents from Santa Claus'

Miwako Ito

豊岡短期大学 論集

第 15 号 別 冊

平成 31 年 3 月 31 日 発 行

保護者と子どもの育ちを展望する支援の試み

—「サンタクロースからのプレゼント」に関するアンケート調査をもとに—

An attempt of the support by prospecting children's development with parents: Based on the surveys on 'Presents from Santa Claus'

伊藤 美和子

Miwako Ito

本研究の背景と目的

現在、保護者における育児不安や育児負担の軽減が課題となっており、保育士だけでなく、保育研究に携わる研究者、大学や短大等で保育士養成に関わっている教員が保護者支援に関わることが多くなっている。しかし保護者の育児に関する悩みや課題には、研究者や教員の知見からだけでは解決が難しい問題もある。

その例として、本稿では「サンタクロースからのプレゼント」に関する悩みを取りあげる。子どもが幼児のときには、クリスマス行事は一般に、家庭でも保育所や幼稚園等でも楽しいイベントの1つである。しかし小学生になると、子どもはサンタクロースの実在性について懐疑的になっていき、親はいつまで自分が「サンタクロースからのプレゼント」を用意すべきかと戸惑うようになる。筆者が保育士養成と育児サークルの運営に携わる中で、毎年、保護者からこの課題を投げかけられる。またインターネットの育児支援サイトでもたびたび目にする悩みである¹⁾。

こうした悩みには家族構成員の価値観が大きく関係しており、正解があるわけではない。また社会の変化が著しい昨今、保護者は一人の自立した人間として自分の家庭の在り方を決定していくのが望ましい。研究者や教員が「答えを与える者」とならず、保護者を支援していくにはどうしたらいいのか。この課題を解決するために、本研究では佐伯胖氏のドーナツ論と、心理学における「時間的展望」論から視座を得て、往復的調査と支援を試みることにした。

佐伯のドーナツ論によれば、子ども「I」には、二人称的に向きあい、社会・文化的実践の世界、すなわち現実世界に出会わせてくれる保育者「YOU」が必要である。子どもを深く理解し、子どもの現在を受け止め、社会「THEY」に向けさせてくれる中間的存在が保育者であり、保育者がいるこ

とで、子どもと社会がつながっていくという²⁾。

しかしこの YOU である保育者が、子どもである I を社会・文化的実践の世界 THEY にうまく出合
すことができない場合もあるのではないか。特に、育児経験や正確な情報が不足している一般の保護
者は、今、目の前にいる、絶えず予測不可能な変化をしている子どもを理解しきれないことがあろう。
YOU の行動や判断が揺らぐ時こそ、YOU に寄り添いながらも、YOU に新しい視点を与え、気づき
をもたらしてくれるもう一人の YOU²による支援が必要になるだろう。

では YOU²が与える新しい視点とは何か。揺らぐ YOU に気づきを促す視点の一つとして、子ども
のその後の成長と自分の育てられ方を展望する、という時間的展望が有効であると筆者は考える。白
井によれば時間的展望は、過去を回想したり、未来を想像したりすることにより、現在の苦しみを軽
減したり、問題解決に向かわせたり、未来に希望を持たせてくれるという心理学的機能をもつ³⁾。

本研究で取り上げる「サンタクロースからのプレゼントを子どもが何歳になるまで親が用意すべき
か」という問題についても、時間的展望は有効だと考えられる。自分の子どもは今後、「サンタクロ
ースからのプレゼント」をどう受け止めるようになるのか（どう育っていくのか）、自分自身はクリ
スマスをどう受け止めてきたのか（どう育てられてきたのか）を保護者と支援者が共に展望するこ
とは、子どもを育てるという営みを別の角度から見つめてみるきっかけになると期待できる。

本研究では、上記の視点を取り入れ、「サンタクロースからのプレゼント」を題材に、往復的調査
と支援を試みる。調査Ⅰとして、保護者が具体的に何を問題にしているのか、クリスマスをどう捉え
ているのかを明らかにするため、小学生の子どもをもつ保護者を対象に、「サンタクロースからのプ
レゼント」に関しての調査をする。調査Ⅱとして、大学生を対象に、サンタクロースを何歳まで信じ
ていたか、なぜ信じなくなったか、クリスマスや「サンタクロースからのプレゼント」を用意した大
人たちをどう思うかについて調査する。調査Ⅲとして、調査Ⅱの結果を、調査Ⅰと同じ保護者に提示
し、質問紙、メール、面談で保護者の感想を聴き取る。以上のように、筆者が支援者として保護者と
二人称的に関わり、共に子どもの将来の育ちを展望していく往復的調査と支援を試み、支援の効果を
明らかにすることが本研究の目的である。

各調査の方法と内容、結果、考察

サンタクロースのような空想上の人物を幼児がどう認識しているのかについての研究は既に複数、
存在している^{4)～6)}。これら先行研究によれば、戦前はその存在さえほとんど知られていなかったク
リスマスが、高度経済成長期以降、日本中に広まると、子どもたちはサンタクロースの存在を信じる
ようになった。大人による演出により、想像物の中でも特にサンタクロースの存在が子どもにおいて
長期間、信じられている可能性がある。富田によれば、保育所・幼稚園のうち 98.1%がクリスマス会
を実施、91.2%で扮装サンタクロースが登場している。クリスマス行事は子どもに、想像世界への没

入、経験の多様性、幸福感情をもたらし、異文化理解を促すものとしてほとんどの園で基本的に肯定的に評価されているという⁷⁾。こうした背景も、子どもがクリスマスの主役であるサンタクロースは実在すると信じることに影響を与えているだろう。

ところが、サンタクロースの実在性への信念は、子どもが小学生になったときに保護者にとって問題となってくる。サンタクロースのように、子どもが幼児のときに大人が積極的に演出していた想像物について、後からその真偽を明かすことに保護者は戸惑うようである（本稿、調査Ⅰ参照）。

上述のように、子どもがサンタクロースのような想像物をどう認識しているのかについての研究が公開されている^{4)～7)}にも関わらず、こうしたサンタクロースに対する認識の発達についての研究成果は一般の保護者には届いていない。筆者も2007年から毎年、大学生を対象に、サンタクロースの存在を何歳まで信じていたかを調査し、その結果を学生に公開し、学生の子ども理解に利用してきた⁸⁾が、その結果を保護者と共有したことはなかった。

そこでまず保護者が「サンタクロースからのプレゼント」に関して何に困っているのか、クリスマスをどう捉えているのかを明らかにするために、調査Ⅰを行った。

Ⅰ. 保護者を対象とした調査の方法と内容

- 1) 調査協力者 主に関西に居住している、小学生の子どもをもつ保護者17名である。
- 2) 調査時期と方法 2017年11月、質問紙によるアンケート調査と、可能な場合、面談調査を行った。その際、保護者と筆者がオープンに話ができるよう場所と時間に配慮した。
- 3) 倫理的配慮 調査開始前に、調査協力者に調査目的を口頭・紙面で説明し、同意を得た。
- 4) 主な質問内容 主な質問内容は、以下の4つである。
 - ①保護者自身が子どもの頃、「サンタクロースからのプレゼント」をもらっていたか。
 - ②自分の子どもに「サンタクロースからのプレゼント」を用意しているか。
 - ③園（保育所、幼稚園等）でクリスマスを祝うことをどう思うか。
 - ④サンタクロースからのプレゼント」に関して、困っていることはあるか。

5) 調査結果と考察

質問①から③については、表1のとおりである。本調査の対象となった保護者の52.9%が幼少時に「サンタクロースからのプレゼント」をもらっていた。そして保護者全員が自分の子どもにも「サンタクロースからのプレゼント」を用意していると回答している。園でクリスマスを祝うことについては、すべての保護者が、子ども達が楽しみしているとのことで、肯定的に捉えていた。ただ、サンタクロースの足跡をつけたり、サンタクロースからの手紙を書いたり、という園側の過度な演出については否定的な回答があった。

表1 保護者による質問①から③への回答と割合 (%)

質 問	保護者の回答
①親自身が子どもの頃、「サンタクロースからのプレゼント」をもらっていたか。	もらっていた 9名 (52.9) もらっていない 8名 (47.1)
②自分の子どもに「サンタクロースからのプレゼント」を用意しているか。	用意している 17名 (100.0) 信じていない 0名 (0.0)
③園でクリスマスを祝うことをどう思うか。	良いと思う 17名 (100.0) 良いと思わない 0名 (0.0)

表2 保護者が「サンタクロースからのプレゼント」に関して困っていること

分 類	保護者の回答
ア) サンタクロースの存在に疑いを持ち始めた子どもへの対応	・本当にサンタクロースがいるのか、親がプレゼントを用意しているのではないかと、なぜ欲しいものが分かるのかと子どもがきいてくる。
イ) サンタクロースの実態について問われた時	・サンタはどこに住んで、どんな感じの人なのか、きいてくる。
ウ) 年齢が異なる子どもへの対応	・年長の子は信じていないようだが、年下の子は信じているので、対応に困る。
エ) プレゼントについて	・子どもが欲しがるものを与えてよいのか、予算はいくらが適当か。 ・高価なもの、入手不可能なものを欲しがられて困る。 ・子どもに知られないようにプレゼントを購入すること。
オ) 何歳まで親が用意するべきか	・子どもが大きくなってきたが、何歳まで親が用意したらよいか。 ・いつまでも信じさせてよいか。

質問④の「サンタクロースからのプレゼント」に関して困っていることは、表2のようにまとめられる。表1のとおり「サンタクロースからのプレゼント」をもらったことがある保護者は約半数であったが、回答者全員が、親になった今では、クリスマスを年末の楽しい行事として祝い、自分の子どもに「サンタクロースからのプレゼント」を用意している。しかし子どもの年齢が上がっていくにつれ、保護者自身も子どもの成長に気づき、オ)のように、今までと同じ対応で良いのか、また、ア)、イ)のように、サンタクロースの存在についてどのように説明すればよいか、苦慮することが多くなっていくようである。

II. 大学生を対象とした調査の方法と結果

子どもがどのように「サンタクロースからのプレゼント」を認識し、年齢を経るとどのように変わ

るかを明らかにし、その結果を上記の保護者に提示する目的で、以下のような調査を行った。

1) 調査協力者 関西の大学の教育系学部に在籍する 169 名の大学 3 年生（国立大学 38 名、私立大学 131 名）である。

2) 調査時期と方法 2017 年 11 月に実施した。

3) 倫理的配慮 調査開始前に、調査目的を説明し、同意を得た。サンタクロースのプレゼントに関する不快な思い出をもつ学生がいることが予想されるので、調査開始前に、無理に回答しなくても良いこと、世界には文化・宗教的にクリスマス行事がない地域が多いこと、さらに「私は一度もクリスマスプレゼントをもらったことがない」という筆者自身のエピソードを話し、学生の不安を取り除くよう努めた。

4) 主な質問内容 主な質問内容は以下の 4 つである。

- ①何年生まで、サンタクロースを信じていたか。
- ②どのようなきっかけで、サンタクロースはいない、と思うようになったか。
- ③サンタクロースがいなかった当初、どういう気持ちだったか。
- ④クリスマスに関して、子どもの頃の教員、保育者、親等、大人に対して、今、どう思っているか。

5) 調査結果と考察 「何年生までサンタクロースの存在を信じていたか」についての回答は表 3 のとおりである。小学中学年終わりには、サンタクロースの存在を信じない者が多数派になる。

サンタクロースの存在を疑うようになったきっかけは、表 4 のようにまとめられる。本研究の調査結果は、麻生⁵⁾、富田⁶⁾の結果と共通点が多かった。中学年くらいからサンタクロースの存在を信じなくなってくる。それは、家族や友達から知らされるほかに、他者からの情報を理解したり（アの⑤）、事象を観察したり（イの①、③）、論理的な因果関係で物事をみたり（ウの③）、さまざまな心理的能力が発達してくると、サンタクロースの存在について疑問を持つようになるからである。また謎を解くために、子どもが実際に行動できるようになってくる（ウの①、②）ことも関与している。

表 3 サンタクロースを信じなくなった学年の人数と割合（％）

学年	割合
幼児期	12 (7.1)
小学 1 年生	7 (4.1)
小学 2 年生	20 (11.8)
小学 3 年生	29 (17.1)
小学 4 年生	33 (19.5)
小学 5 年生	27 (16.0)
小学 6 年生	22 (13.0)
中学生	8 (4.7)
その他※	11 (6.5)
合計	169 (99.8)

※その他の内訳は、今も信じている 5 名、信じていない 4 名、覚えていない 2 名である。

表 4 サンタクロースの存在を疑うようになったきっかけ () は信じなくなった学年

分類	保護者の回答
ア) 他者からの情報	①親に、プレゼントは何がいいかきかれたから（小 2）。

報	②信じていたのに、親から、「もうわかるとるやろ」と突然、言われた（小4）。 ③誕生日が12月で、誕生日にipadを買ってもらったので、親に「サンタさんは何くれるかな」と言うと、「え、ipad高かったからないで。サンタさんもつらいつて言ってる」って言われて気づいた（中1） ④2歳差の姉に「サンタクロースはお父さんとお母さんだ」と伝えられて（小2）。 ⑤ラジオで、「私は小4までサンタクロースを信じていましたが、皆さんは何歳ごろまで信じていましたか？」という投稿が紹介されたのを聞いて（小4）。
イ) 偶然、自分が経験したり、観察したりした結果	①プレゼントにサンタさんからの手紙がついていて、それが母親の字だと気づいてから、サンタさんはお母さんだと思うようになりました（幼児期）。 ②布団に入ってすぐに、兄がプレゼントを枕元に置きにきたから（小2） ③サンタクロースからもらったと思っていたDSの箱に、地元のデパートの領収書みたいなのが入っていたから（小5）。 ④母のかばんの中からクリスマスプレゼントがみえたから（小6）。
ウ) 自ら探究活動をし、論理的に考えたりした結果	①本物のサンタを見たことがなくて、夜、頑張って起きて、サンタの姿をみようとしたら、親だった（小3）。 ②家の倉庫を開けると、リボンのついた自転車を発見した（小5）。 ③煙突はないし、家の戸締りもしっかりしているし、サンタさんが入ってくるのは物理的に無理だと確信したから（小5）。

質問③で「サンタクロースがいなかったと思った当初の気持ち」に対する回答を集計すると、サンタクロースの存在を信じていた学生のうち、約8割は、その当時は、落胆したり、悲しくなったりと否定的な気持ちになっていた。約2割は「やっぱり」と不本意ながら受け入れていた。

質問④で、大学生になった今、クリスマス会やプレゼントを用意した大人（保護者や保育士、幼稚園教諭等）に対してどのような感想を持っているか尋ねたところ、表5のような回答が得られた。

大学生になる頃には、ほとんどの者が大人の姿勢や努力に感謝するようになっている。プレゼントをもらったことがある学生全員が、ア)のように、クリスマス会を準備してくれた親や幼稚園・保育所に感謝していた。さらにイ)にみられるように、子どもに夢をみさせようと、陰で努力を続けてきたことにも気づき、その労をねぎらう回答があった。そしてエ)のように、大人になった自分も、子ども達にサンタクロースの存在を信じてもらいたいし、信じてもらえるよう行動したいという回答も多くみられた。エ)③のように、大学生は、大人が「嘘をついていた」とは捉えず、大人の行動を客観的にみていることが分かる。

ただし、サンタクロースの存在について、「親がプレゼントをあげている」と、子どもにとって唐突にあるいは乱暴に親から告白された場合は、落胆が大きいようであった。またプレゼントをもらっ

たことがない学生、初めから、もしくは、幼児期にサンタクロースの存在を信じなくなった大学生は、ウ)のように、存在を信じさせてほしかったという感想を述べていた。

表5 クリスマス会やプレゼントを用意した大人に対する感想 ()は信じなくなった学年

分 類	保護者の回答
ア) 大人への感謝、肯定的な気持ち	①今思えば、「これは母の字だな」と思い、あたたかい気持ちになる。本物のサンタさんがどう、でなくて、私にとっては今でも母がサンタさんだと思う (小1)。 ②すごいな、と思った。がんばってくれたんだなあ、と感じた (小6)。 ③子どもたちをワクワクさせる、[サンタが] いるように工夫する、夢を与えることができる大人はとても尊敬します (小6)。 ④大人のすてきなはずら (その他)。 ⑤先生たちは、クリスマス会のときにサンタさんと呼んできてくれて、その時は本当にサンタがいると思ったから、プレゼントをもらえたときには嬉しかった (小4)。 ⑥保育園に外国人の人がサンタ役でできていたので、大変だったんだろうと思う。けど子どもに強い印象を与えて、思い出になっているので、感謝 (小1)。 ⑦愛されていたんだと感じる (小6)。
イ) 大人への気遣い、思いやり	①忙しい中、用意してくれて、感謝している (小2)。 ②早い段階で気づいてしまって申し訳ないという気持ちです (年中)。 ③高価なプレゼントをねだって、ごめんなさい (中1)。 ④三人分のプレゼントを用意するのは大変だったと思う (小4)。
ウ) 信じさせてほしかった	①親には小学生くらいまでは、サンタの存在を信じさせてほしかった。私が保育者になったら、夢があるようにサンタさんの話をしたいと思う (年少)。 ②保育園や小学生のころ、周りの友だちが、「サンタさんから〇〇もらった」と楽しそうに話をしていました。私の家にはサンタさんが来なかったので、毎年、クリスマスはさみしい思いをしていました。サンタさんは子どもたちに夢をあたえてくれる存在だと思うので、やってあげるべきだと思いますし、やってほしかったです (その他)。
エ) 自分が大人になったときの行動	①サンタクロースという夢をみさせてくれて良かった。自分が親でもそうしてあげたい (小5)。 ②私も早くサンタさんになりたいと思っています (中2)。 ③子どもの夢のために正体を隠していると思うので、正体を隠すことは悪いとは思わず、むしろ子どもができたとき、きちんと夢を見せたいと思った (中1)。 ④サンタさん宛の手紙に答えてくれたり、手紙に書いたプレゼントをくれたりして、クリスマスを楽しませてくれた親に感謝している。自分も子どもがワクワクできるような関わりをして、クリスマスを楽しむことができれば良いな、と思っている (その他)。

Ⅲ. 保護者を対象とした調査の方法と方法

- 1) 調査協力者 調査Ⅰと同じ保護者17名である。
- 2) 調査時期と方法 2017年12月に実施した。
- 3) 倫理的配慮 調査開始前に、調査目的を説明し、文書で同意を得た。
- 4) 調査内容 調査Ⅰと同じ保護者に対し、Ⅲの大学生対象の調査結果と解説を、紙面と対面により提示した。
- 5) 得られた感想の分析と考察

大学生を対象とした調査結果を手にした保護者からの感想は、表6のようにまとめられる。ア)のように、ほとんどの保護者は、予想以上に子どもが長い間、サンタクロースを信じていることに驚いていた。そのため、イ)のように、「サンタクロースからのプレゼント」の継続を再考するコメントが多かった。

そして、ウ)のように、調査結果から子どもと成長した大学生の気持ちを知ることで、クリスマスという行事自体の意義を改めて考えるきっかけになっている。さらに、エ)の①と③のように、自分の親、自分が育てられてきたことにも思いを馳せる回答がみられた。

表6 大学生対象の調査結果に対する保護者の感想

分 類	保護者の回答
ア) 驚き	①驚いたことは意外にもサンタクロースを信じていた年が思ったよりは、高学年だったことです。
イ) 子どもの夢を壊さないよう努力しようという気持ちになる	①子どもの夢を守るために、頑張りたいと思います。 ②大学生の意見からももっと信じていたかった、信じさせてほしかったような意見や親の思いを見てもわかるようにこのまま信じているのならそれを壊さずもう少しプレゼントを贈り続けてもいいのかなと考えるようになりました。 ③今はもう疑っているのだから、サンタ役はもうやめようと思い始めていたが、少し思いとどまる内容の調査結果でした。
ウ) クリスマス行事の意義を再認識する	①改めて考えると、クリスマスは暖かく幸せな行事ですね。 ②なんとなくクリスマス、に抵抗をもちました。 ③色々考える幅が出来ました。 ④当たり前のように世間に溢れるクリスマスの諸々が一部の子供達には、辛く寂しい時間や風景になっている場合もあります。クリスマスにプレゼントが貰えケーキが食べれる事が当たり前ではない世界もある事も知って欲しいと思います。 ⑤プレゼントの有無よりも、クリスマスを通して、家族の思い出や、周りへの感謝など、あの学生さんのように人の気持ちや、感謝の心を持つ娘になって欲しい、いつか M (娘)

	がお母さんになった時に色々思い出してくれると嬉しいなと思います。
エ) 親への感謝	①私も幼少の頃から一度もサンタクロースが来たことはありませんでしたが、今となっては事情も理解し、育ててくれて感謝しています。同じ境遇の方の回答を読んで暖かい気持ちにもなりました。 ②プレゼントは貰えなかったけど育ててもらって感謝、というのもまた、クリスマスなどに湧く感情なんだろうなと思いました。じーんとききました。 ③子供の頃のことを考えると思い出深いですね。やはり親のことを想います。当時の。 ④ある学生さんが、サンタクロースの手紙を大切に保管し、お母さんをサンタだと思うという最後のコメントに胸があつくなりました。

保護者は現在の大学生の回想によってではあるが、子どもがサンタクロースについてどのように感じ、将来、どう捉えるようになるかを知る。それによって、「サンタクロース」についての保護者の不安や戸惑いが軽減されるようである。保護者が子どもの成長した姿を予想できることで、現在の自分の育児上の悩みは一時的なものと捉えることができるようになるからであろう。またこうした機会をもつことで、クリスマス自体の意義を再認識し、クリスマスを自分の家庭だけの問題としてではなく、過去の子育てや未来の子育てに思いを巡らしたり、他の家庭や地域の問題としてみたりと、視野を広げている様子が伺える。

結語

本研究の目的は、「サンタクロースからのプレゼント」に関する問題を、筆者が支援者として保護者と二人称的に共有し、時間的展望の視点を取り入れて、往復的調査と支援を試み、支援の効果を明らかにすることであった。まず調査Ⅰで保護者のサンタクロースに関する悩みやクリスマス行事に対する姿勢を明らかにした。次に調査Ⅱで子どもにおけるサンタクロースについての認識がどう発達するのか、大学生の回想から確認した。さらに調査Ⅲで、Ⅱの結果を保護者に提示した。保護者が自分の子どもの将来の姿を予想できるようになったことで、「サンタクロースからのプレゼント」やクリスマス行事を再認識するようになる様相が読み取れた。また自分が幼少時に、どのようにクリスマスを祝われていたかを回想し、さまざまな人々の状況や気持ちにも思いを馳せるようなコメントが得られた。

保護者は我が子を育てることに悩み、戸惑うことがあるが、子どもの今後の育ちが予想できると安心するようである。そして、クリスマスを題材にして、自分がどう育てられてきたか、大人が子どもにどのように関わってきたのかを回想することで、さまざまなことに気が付いていく。プレゼントがもらえなかった子どもたち、同世代の他の親たちなど広い視野で見えるようになっている。自分の子育て

ての過程で、子どもの育ちを予想したり、自分が育てられてきた過去を回想したりする、という時間的展望は、保護者の心的負担の軽減だけでなく、子育てを再認識するきっかけを与えてくれる。

一方で、研究者・教員である筆者が YOU²として保護者と二人称的に関わったという確証は得られなかった。人と関わりの深さは極めて主観的で、関わったかどうかを客観的に判断するには、心理学的な分析手法が必要であろう。しかし、保護者が問題を共有し、往復的にやりとりする形式をとったことで、保護者にさまざまな気づきを生み出せたと考えている。

最後に課題を挙げておこう。今回、調査対象となる保護者の数は少なく、地域的に限定されていた。また対象家庭の環境と家族構成が、筆者と類似していたので、関わるのが容易であった。しかし地域、家族構成、家庭文化が異なる保護者が対象となった場合、同じように二人称的に関わることは研究者にとって容易ではないだろう。核家族が一般的となり、近隣関係も疎遠になった都市空間で、誰が保護者と二人称的に往復的に関わるができるのか。今後も、地域に根差した子育てネットワークづくりの在り方に関する議論、ネットワークづくりへの支援が必要になるだろう。

引用文献

- 1) 例えば、ニコママネット〈<https://nikomama.net/archives/1201>〉(2018年10月9日10時31分)。
Yahoo 知恵袋など悩み相談のページでも取りあげられる。
- 2) 佐伯 胖.(2010). 人間の発達の軸としての「共感」. 佐伯 胖(編). 共感：育ち合う保育のなかで. (pp. 1-38). 岩波書店.
- 3) 白井利明. (2001). 〈希望〉の心理学. 講談社.
- 4) 杉村智子・原野明子・吉本 史・北川宇子(1994). 日常的な想像物に対する幼児の認識：サンタクロースは本当にいるのか？. 発達心理学研究, 5(2), 145-153.
- 5) 麻生 武. (1996). ファンタジーと現実. 金子書房.
- 6) 富田昌平. (2014). 子どもはなぜサンタクロースを信じ、やがて信じなくなるのか？：大学生による回想報告をもとに. 三重大学教育学部研究紀要, 65, 149-158.
- 7) 富田昌平. (2015). サンタクロースとクリスマス行事に対する大人の態度と支援. 三重大学教育学部研究紀要, 66, 265-272.
- 8) 伊藤美和子. (2012). ことばとともに在るもの：遊びvs.学びを超えて. 口頭発表. ヴィゴツキー学協会主催ヴィゴツキー・セミナー.